

地域開放された共用空間の使われ方に関する研究 - 複合型高齢者福祉施設における事例考察 -

キーワード：複合型高齢者福祉施設 共用空間
観察調査 交流行為 地域開放

石井研究室 及川みどり
鷲谷陽子

1. 研究の背景と目的

近年、高齢者施設においては、地域とのつながりが重要視されている。特に入居の高齢者にとっては、施設内で生活を送ることが主となるため、そのなかでいかにして地域社会と接点を持ちうるかということが重要なテーマとなっている。しかし現実には、デイサービスやデイケアとの併設を除き、他の機能と高齢者福祉施設とを複合的に計画することは、制度的な違いもあり難しい側面がある。

本研究では、他機能との複合化を図り、地域開放された共用空間をもつことで、各種の施設利用者や地域住民とのかかわり、交流を生み出すことを目指して計画された複合型高齢者福祉施設を対象として調査を行った。複合化がもたらすことを、特に地域開放された共用空間の使われ方に着目して調査分析し、その利用実態を明らかにすることを目的とした。

2. 施設概要

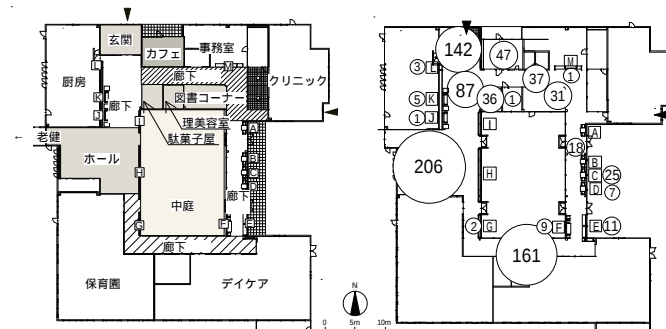
調査対象施設は、中庭を囲み地域開放された共用空間を持つ。そこを中心として、老健、保育園、デイケア、クリニックが複合的に計画されている珍しいタイプの複合型高齢者福祉施設である<表1>。

3. 調査概要

調査はH18年10月24日(火)8:00～17:00、H18年11月9日(木)8:00～16:30の二日間にわたり共用空間の利用の実態を10分毎に平面上にマッピングする方法

<表1>施設概要

定員	老健:100名 通所:30名	職員数	老健・介護職員:51名 デイ職員:14名 クリニック職員:4名
利用者数	老健入所者:88名 デイ登録者:120名 (1日当たりの平均通所者数)32名 保育園児:61名 クリニック利用者(1日当たりの平均利用者数)30～34名	総数	約5800人(約900人) ()内は共用空間のみ
		建物概要	延べ床面積:6798.00㎡ 規模:三階建て 構造:RC造、S造 開設:平成15年4月20日



<図1> K老健共用空間平面図

<図2> 空間別利用頻度

で行った<図1>。

4. 調査結果と考察

4-1 空間別に見た共用空間の利用頻度

調査の結果、二日間の調査において空間利用の傾向は同様であった。図2に調査一日目の各空間の利用頻度(人数)を示す。特に「玄関」、「ホール」、「廊下」、「廊下」の利用頻度が高いことがわかる。「カフェ」や「駄菓子屋」はほぼ同じ程度で、40人前後の利用が見られた。調査日によつての異なる点としては、ホールの利用頻度で、図の調査一日目の頻度が高い。これは雨のため園児が利用していたためであるが、調査二日目は晴れていたため中庭の利用が多くなっていた。4-2 共用空間の利用者を属性別に見た利用様態

<表2>利用者属性と人数

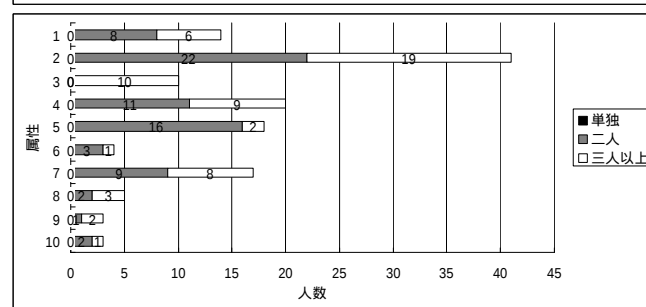
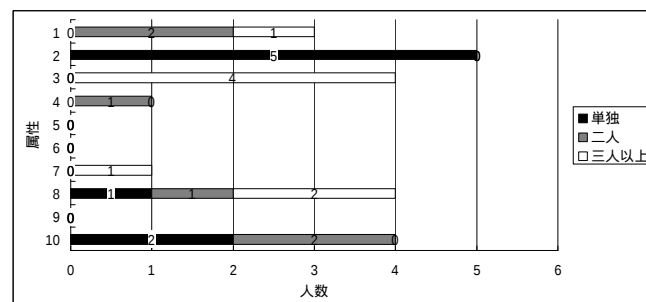
属性	利用者	スタッフ	来訪者	計
単独	175	483	171	829
2人	217	223	143	583
複数(3人以上)	734	375	175	1284

単位(人)

<表3>利用者属性と行為

属性	利用者	スタッフ	来訪者	合計
歩く	564	538	358	1460
散歩	7	3	3	13
話す	65	59	11	135
見る	12	2	8	22
読書	31	3	0	34
休む	27	61	30	118
買う	13	22	7	42
遊ぶ	146	36	0	182
その他	283	88	72	443

単位(人)



1 老健入居者	2 デ利用者	3 保育園児	4 老健スタッフ	5 デイスタッフ
6 事務スタッフ	7 その他スタッフ	8 老健来訪者	9 デイ来訪者	10 その他来訪者

<図3> 利用者別に見た行為と人数 「見る」: 上 「話す」:

下

日間の合計（観察回数110回）で最も多かったのは、複数（3人以上）による利用で延べ734人、次いで単独のスタッフで延べ483人であった。「複数・利用者」の多くはデイのリハビリ行為、デイの仲間での交流・集まり、園児の集まりなどであった。「来訪者」の利用は延べ500人近くあるが、その多くは園児の送迎の父母や面会の家族などで、カフェや売店を目的に来る地域の人はいなかった。「利用者」のうち老健の入居者の利用は15名弱と多くはなかったが、散歩に来る、家族でカフェに行く、図書コーナーに立ち寄るといった利用が見られた。いずれにしても共用空間を利用していたのは4施設の利用者かその関係者に限られていた。

さらに利用者の行為を9分類し分析を行った<表3>。その結果、「歩く」、「話す」といった行為が多く、特にデイ利用者で多く見られた。また「読書」、「休む」といった行為も少ないながら見られた。さらに具体的な内訳をみると、「見る」では「デイ＋単独」が5人、「話す」では「デイ＋二人」が22人、「デイ＋複数」が19人とデイ利用者が多いことが示されている。

4-3 事例を通して見る空間の利用と交流

事例を通して共用空間の利用の様態を具体的に見てみる<図4>。<事例2>、<事例5>は老健入居者の利用の場面である。老健入居者にとってこの共用空間は地域社会と接点を持つことのできる空間である。デイ利用者と会話を交わす、園児の遊ぶ様子を眺めるという場面も見られた。また<事例3>のようにデイ利用者が廊下で読書をしている場面、さらに他施設のスタッフと交流をする場面も見られた。デイ施設の空間を超えての利用者の利

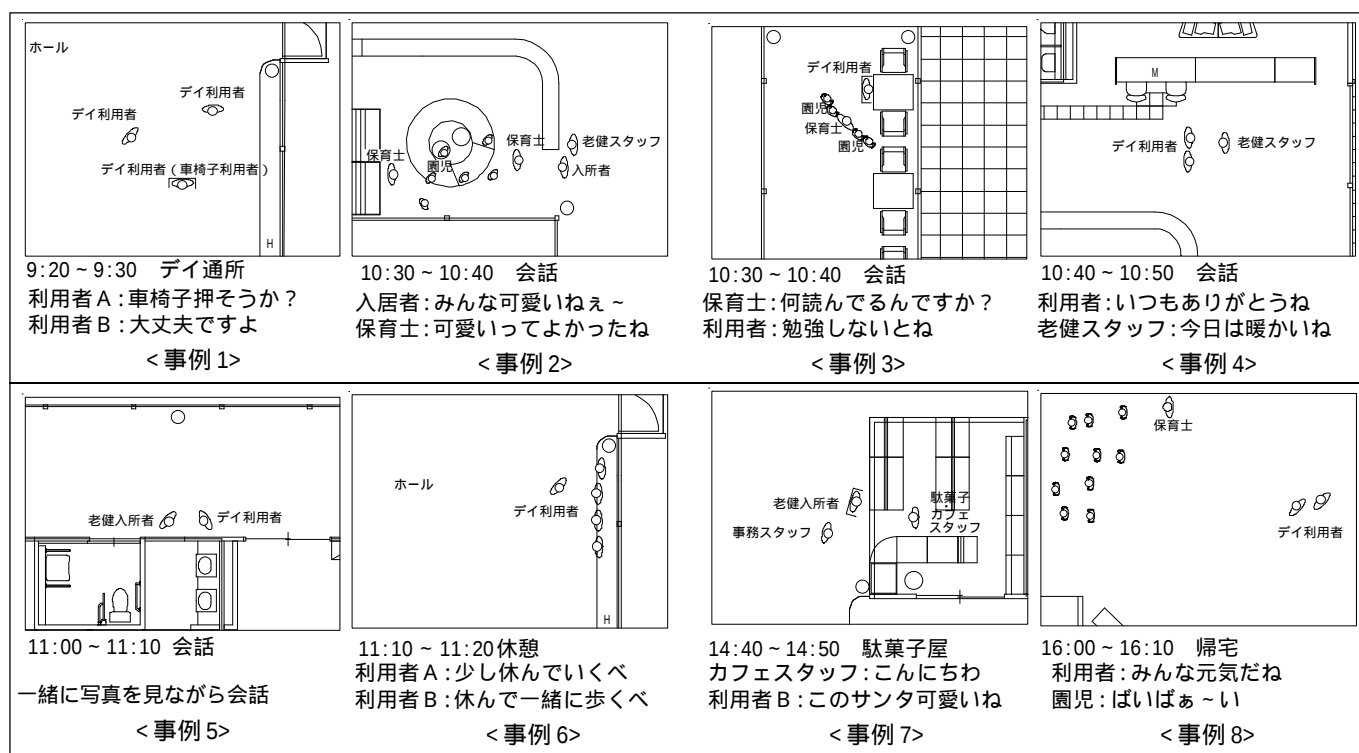
用、そこから生まれる他者との交流は、この複合型施設の空間によってもたらされたものであると考えられる。

<事例1>、<事例5>、<事例6>ではデイ利用者が共用空間をさまざまな形で積極的に利用ながら、他者と交流を持っている場面が示されている。このほか、共用空間内では利用者とスタッフ、利用者と来訪者など他施設の利用者やその関係者との間で交流が生まれていた。特に<事例2>、<事例3>、<事例8>のように高齢者と子供との自然な交流が生まれるのもこの施設の複合化、空間の構成によるところが大きいといえる。

5. まとめ

今回の調査により、共用空間での利用様態が明らかになった。4施設の複合化により、単独で設ける場合とは異なるさまざまな交流の場面が観察された。中庭と周回廊下を中心とした平面構成、点在して置かれたベンチ・イスなどの居場所がうまく機能していた。また、共用空間では各施設のスタッフが、積極的にデイ利用者などに声を掛けている場面が観察された。カフェや駄菓子屋なども、施設利用者や家族にとって通常の施設では見られない滞在を促していたといえる。

一方、「地域開放」されてはいるものの、その利用は施設関係者に限られ、地域住民の利用は見られなかった。老健入居者の利用も決して多くはなく、地域に開かれた施設として、また施設入居者にとって価値のある場とするためのあり方の検討が今後求められるだろう。



<図4> 場面を通して見た空間の利用と交流